【研究ノート】

アクティブラーニングに必要な「聴く」という技能・態度

太　田　昌　宏※

Listening skill and the attitude necessary to active learning

Masahiro Ota

キーワード：アクティブラーニング、認知構造、聴く
Active learning , Cognitive structure , Listening

要旨

アクティブラーニングは「能動的な学習」のことだと説明されることが多い。このことから、アクティブラーニングを取り入れた授業では、学習者が「書く、話す、発表する」などの能動的な学習をする場面が多く、そこに注目が集まる。

本研究ノートでは、「能動的な学習」に注目するだけでよいのかという観点から、アクティブラーニングのあり方について考察した。

考察の結果、アクティブラーニングが有効に機能するためには、「聴く」という受動的な技能・態度の育成こそが、まずは必要ではないかと考えられた。

1　アクティブラーニング導入の背景

近年、大学では「アクティブラーニング」と総称される学習形態が盛んに導入されている。「アクティブラーニング」とは「能動的な学習」のことで、教員が一方的に学生に知識を伝達する授業形態ではなく、学生が、発見学習、問題解決学習、ディベート、ディスカッション、プレゼンテーションなどに取り組む授業形態をとる。

「アクティブラーニング」が導入される背景として、粗くいって、次の三つが指摘されている。

① 大学進学率が50％を超えるようになり、大衆化した大学においては、講義型の授業を提供していたのでは、大きな教育効果が期待できなくなった。

② 世界的な大学教育の流れの中で「教師中心の教育」から「学習者中心の教育」への模索が本格化してきた。つまり、「教員が、何を教えたか」ではなく「学生が、何ができるようになったか」を基準として、教育を考える動きが広まった。

③ 社会からの要請として、「知識を取り入れる」だけでなく「知識を活用する」人材が求められるようになった。

※ 明星教育センター　特任准教授

2　アクティブラーニングの定義とアクティブラーニングで育成する技能・態度

このような背景をもつ大学教育現場へのアクティブラーニング導入に関し、現在、中心的な役割を果たしている溝上は、アクティブラーニングを次のように定義する。

> 一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での､あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く･話す･発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。（溝上，2014，p.7）

この定義のポイントは､「認知プロセスの外化を伴う」という箇所である。認知プロセスの外化を伴わない学習、つまり、教員の講義を「聴く」という学習は、たとえ学生がどんなに興味関心をもって主体的にその講義を聴いていたとしても、それはアクティブラーニングではないことになる（図 1)。

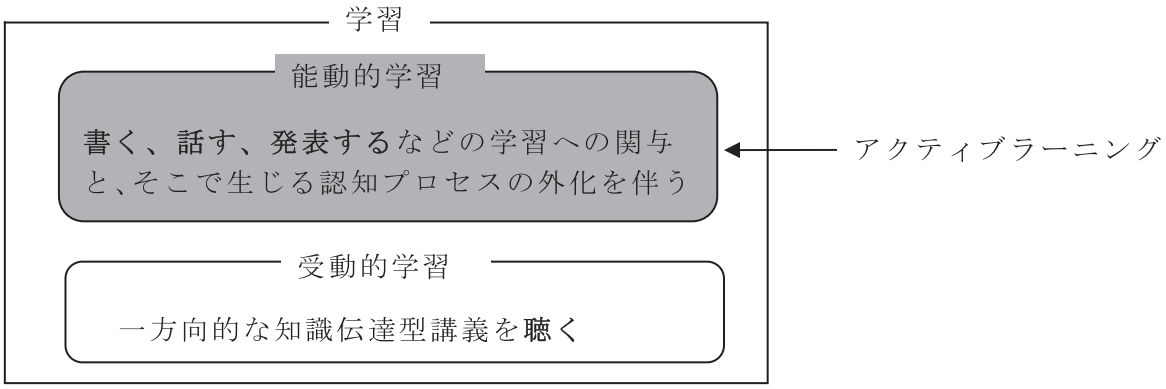

図 1

さらに溝上は、大学で扱う（学問的背景のある）知識の操作を伴う技能・態度（能力）がアクティブラーニングで育成すべきものであることを強調する（図 2)。

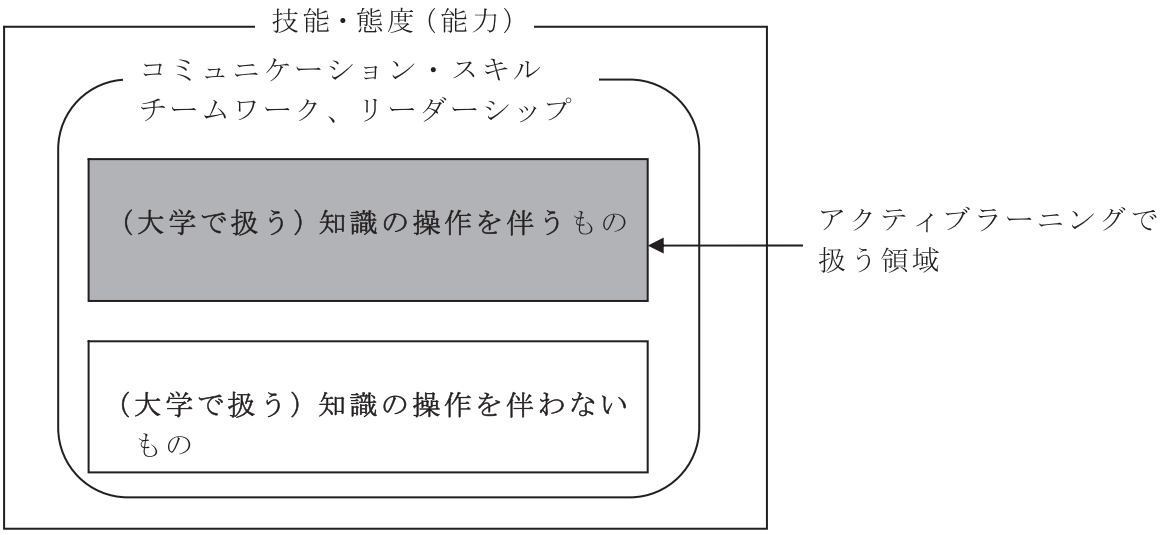

図 2

例えば、溝上は次のようにいう。

> アクティブラーニングで育成する技能･態度（能力）は､〔中略〕基本的には､知識の操作を伴うコミュニケ―ション・スキルやチームワーク、リーダーシップの能力と考えられるものである。コミュニケーション養成講座や初年次教育の授業でも、「いじめ」や「原発」など、多くの場合は身近なテーマを設定して、それに関する議論やプレゼンテーションをさせるから、そこにまったく知識の操作が関わらないとまで言っているわけではない。しかしながら、そこで用いられる知識は、伝統的なコースや個々の授業（たとえば､「心理学概論」や「マクロ経済学」｢線形代数｣など）で扱われる知識とは､大いにレヴェルや概念性･体系性の点で異なっている。伝統的なコースや個々の授業では、知識がまずあって、その上で技能・態度（能力）がある。はじめに技能・態度（能力）があるわけではない。この順序は、アクティブラーニングで育成するコミュニケーション、ひいては技能･態度（能力）を考える上で、大いに重要である。（前同，p.53）

ここで見逃せないのは、「知識がまずあって、その上で技能･態度（能力）がある」（図 3）という箇所である。「技能・態度（能力）があって、その上で知識がある」（図 4）わけではないという見解だ。

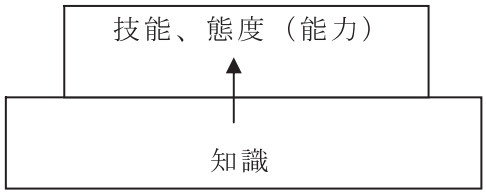

図 3

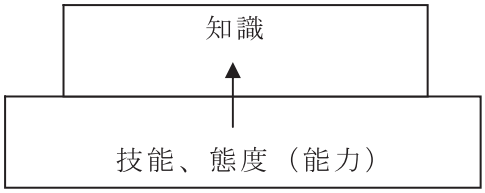

図 4

溝上が、この点を強調するのは、大学教育において、専門知識の習得や活用のためのアクティブラーニングなのに、それ以前の段階で留まってしまう実践があることを懸念してのものと考えられる。

3　アクティブラーニングを論ずるときに見逃されやすい観点

実は、このような文脈で学習が語られる場合、見逃されやすい観点がある。それは、次に挙げる二つである。

① 学習者が学習できているか
② 学習者に「聴く」技能・態度があるか

以下、それぞれについて詳述する。

① 学習者が学習できているか

学習形態が表面上、「受動的か能動的か」という観点に囚われてしまうと、肝心の「学習として有効に機能しているか（学習者が学習できているか）」という観点がおろそかになりやすい。

かつて、「問題解決学習」の功罪について、社会科教育の分野で盛んに議論された際、教育心理学者の西林は、認識論の観点から次のような指摘をした。

> たとえば、「現在の教育の結果は良くない。現在の教育は詰め込みや伝達に偏った教育で、子どもの学習が受動的である。ゆえに、受動的な学習ではなく、自分から興味を持って学習する発見学習や問題解決学習が望ましい」といったような教育論ないし教育改善論はよく耳にするのではないだろうか。〔中略〕
>
> しかし、現在の教育に関する観察と調査をもとにして得た私の結論は、上記の論とは趣を異にする。
>
> 詰め込み教育や伝達に偏った教育とよばれるものの問題点は、実は、充分な知識が詰め込めても伝達されてもいないということなのである。「詰め込み」とか「伝達」という言葉が使われているので、使ったり応用したりするのに必要な知識は、もうすでに学習者に入っているのだと誤解されているのである。
>
> すなわち、知識はすでに存在していると考えてしまうので、教育の結果が良くないという事実の原因を、「受動的な学習」などの「形態」に求めてしまうことになっているのである。
>
> 知識がそもそも学習者の中に入っていないのではないかとか、入った知識の状態や質は充分に使えるものなのかなどの検討なしに、指導形態に批判を向けてしまっているというのが私の考えである。（西林，2001，p.97-98）

検討されるべきは、指導形態が受動的か能動的かではなく、「知識が学習者の中に入っていないのではないか」や「入った知識の状態や質は充分に使えるものなのか」だとする西林の指摘は重要である。なぜなら、アクティブラーニングを導入する大きな目的の一つに、「知識を活用できる人材を育てること」があるからだ。

だとすると次の問題は「どういうときに人は、よく学習できる（知識が学習者の中に入り、充分使えるようになる）のか」である。西林はいう。

> 認知心理学が繰り返し明らかにしてきたことは、「学習内容が、その人の認知構造に合致する時、人は学習しやすい」ということである。認知構造というのは、それまでに、その人が持っている知識の総体という意味であるから、「学習内容が、その人のそれまでの知識の総体に合う時に、人は学習しやすい」と言い換えてもよい。
>
> 人が、何か気になったり、興味を覚えたりするのも、それまでに身につけている知識（認知構造）によるのである。また、それまでの知識（認知構造）に結びつかない新しい情報は、入ってきても、その人の中に、しっかり根を下ろし難いのである。
>
> 学習のされやすさは、外部からの情報と、その人がそれまでに持っている認知構造との関係で決まるのであって、外的な学習形態で決まるのではない。（前同，p.98）

西林がいうように「学習のされやすさは、外部からの情報と、その人がそれまでに持っている認知構造との関係で決まる」のであれば、大学での専門教育で新しい知識を学生に教えるときやその知識を活用させるときにおいても、学生のそれまでの知識の総体との関係に関する検討が不可欠となる。

確かに、溝上のいうように、学生がもっている身近なテーマ（いじめや原発）に関する知識は、「（大学の）伝統的なコースや個々の授業で扱われる知識とは、大いにレヴェルや概念性・体系性の点で異なっている」。しかし学習内容の定

着や活用が「学習のしやすさ」と密接な関わりをもつならば、レヴェルや概念性・体系性の違いに注目するだけではなく、「両者の“接続”ができているか」が、今後、大学教育の現場において問われるべき重要な検討課題となるだろう。

② 学習者に「聴く」技能・態度があるか

「書く、話す、発表する」などの能動的な活動に注目が集まると、「聴く」という受動的な活動は見逃されやすい。しかし、学習者が、教員による知識伝達型講義を「聴く」というときにおいてはもちろん、学習者同士が学んだことについて「話す、発表する」などの学習をする場面においても、「聴く」という技能・態度は重要である。なぜなら、学習者が「話す、発表する」場面では、それを「聴く」学習者が必ず存在するからだ。そして、「聴く」という作業において、学習者は既有の知識と新しい知識との接続を行っている。西林はいう。

> たとえば、聞くという作業は、確かに発言も、目立った外的な活動もない。しかし、聞いて、なるほどと理解や納得をしている時には、頭の中で種々の個別情報を包括できるような一般的論理を作り上げたり、当てはまる例や関連知識を想起するなどの、活発な作業が行われている。認知構造の再編成である。それを指して、外的活動として目立ったものがないから、精神活動まで低調であるとは、とても言えないであろう。
>
> 外的な学習形態が受動的でも能動的でも、学習者の精神活動は活発であり得るし、また不活発でもあり得る。大切なのは、精神活動を活発に行わせることであり、外的な学習形態のみに拘泥して、問題解決学習などのスタイルにすれば、現在の教育問題は解決するというものでないのは当然である。（前同，p.99）

ここでのポイントは、「大切なのは、精神活動を活発に行わせること」という箇所である。学習の質を判断する際に大切なのは、「学習者が精神活動を活発に行わせているかどうか」であって、学習形態が「受動的か能動的か」ではない。

もちろん、能動的な「書く、話す、発表する」という学習においても（おそらくはその準備の段階で）「認知構造の再編成」は起こり得る。しかし、学習が、今までに自分の中になかった知識や考え方を使える形で取り入れることであるとすれば、学習者は、「話す、発表する」技能・態度の前に、「聴く」という受動的な技能・態度こそまずは身につけ、磨くべきではないだろうか。なぜなら、「しっかりと話を聞いて（受け取って）もらえる」という学習者どうしの信頼関係があることで、学習者は、失敗や間違いを恐れず、「話す、発表する」ことに集中できるからである。教室で学ぶ誰もが、「聴く」という技能・態度を身につけることは、「話す、発表する」などの能動的な学習が十全に機能するための前提条件といえる。

さらに、知識との関連で考えると、溝上のいうように、「知識がまずあって、その上で技能・態度（能力）がある」という見方（図 3）に加えて、「『聴く』という技能・態度がまずあって、その上に知識がある」という見方（図 4）も必要であることがわかる。なぜなら、「聴く」という受動的な学習の観点から見た場合、「（聴くという）技能・態度があって、知識がある」という構図も成り立つからだ。

しかし、残念ながら、現在の教育現場では、「聴く」という技能・態度の育成は、あまり注目されていない。今後、アクティブラーニングの教育現場への導入が成功するためにも、「聴く」という受動的な技能・態度の育成にまずは目を向ける必要があるのではないだろうか。

4　まとめ

本研究ノートでは、アクティブラーニングの教育現場への導入について、「能動的な学習」に注目するだけでよいのかという観点から、アクティブラーニングのあり方について考察した。

考察の結果、アクティブラーニングが有効に機能するためには、「学習者が学習できているか」という点に注目する必要があること、そして「聴く」という受動的な技能・態度を育成することが、まずは必要ではないかと考えられた。

引用文献

溝上慎一，（2014），アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換，東信堂

西林克彦，（2001），認識論からみた“その功罪”，明治図書，社会科教育，No.496：97-99